

川崎医療福祉学会誌 Vol. 4 No. 1 1994

原 著

# 『ダーバヴィル家のテス』における ヒロイン・テスのカタストロフィの原因について

橘 智 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成 6 年 4 月 20 日受理)

On the Cause of Tess's Catastrophe in *Tess of the d'Urbervilles*

Tomoko TACHIBANA

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Apr. 20, 1994)*

**Key words :** tragedy, self-sacrifice, self-preservation, ambivalence, pride

## Abstract

Tess, the heroine in *Tess of the d'Urbervilles*, is thought of the most tragical female of other heroines in Hardy's works.

Concerning the cause of Tess's catastrophe, there are two different parts of tragic factors: one is external factors and the other is inner ones.

In this paper I would like to focus and analyze Tess's nature, and especially her self-consciousness, because I regard *Tess* as 'a tragedy of consciousness'. And it is very interesting to find "the ache of modernism" in the expression of Tess's psychological phenomenon in the state of ambivalence. When she is urged to choose one out of two, it is her sense of sin that decides which is. Therefore Tess's tragedy of self-consciousness is doomed to end only by her death.

## 要 約

*Tess of the d'Urbervilles* のヒロイン・テスのカタストロフィの原因を考察する時、外的要因と内的要因が挙げられる。前者は social law, moral order, social prejudice, circumstance など。後者はテス自身の性格的なもの sensitivity, purity, tenderness, responsibility, endurance などである。一見矛盾しているが、Hardy は人間の美徳が常に利につながらず、害に

なるばかりか時としては自己破壊の要因になりうるプロセスをテスの生き様を通して描写している。中でも興味があるのは恐らくこの作品に初めて導入された 'the ache of modernism' の表現に見られる 'a tragedy of consciousness' の vision である。テスは self-sacrifice か self-reservation か或いは self-denying か pride かと言った二項対立の中で選択を迫られる時、この決定権を持つのは彼女の意識、つまり容観性のない彼女自身だけに通じる主観的であり、更に事態と人格を葛藤させる罪の意識によるものである。テスのカタストロフィへの旅は「罪の意識」に支配される 'self-denying' と 'pride' の相克の旅でもあると言える。そして彼女の死によってのみこの実体のない「罪の意識」から解放されるのである。

## I

Thomas Hardy は四大悲劇小説<sup>1)</sup>を書いているが、Hardy のユニークな悲劇構成によってそれぞれの作品には同じ tragic vision, tragic form は見られない。従ってこれらの作品を辿っていくと、次々に悲劇性の質的転化が見られる。ここで取り上げるのは四大悲劇小説の中で最高傑作に目される『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the d'Urbervilles*<sup>2)</sup>) (1891) であるが、「人生の悲劇的精神の神秘さ」に目覚めた現代の精神的な不安が漂っている<sup>3)</sup>、とされる Tess の中で Hardy は、どのような tragic vision, tragic form を用いて Tess の悲劇を構成しているのだろうか。

これについて Dale Kramer が

...the tragic emotion in *Tess of the d'Urbervilles* (is) within the human consciousness rather than within some sort of relationship between the individual and environment, or between individuals, or between individual and the moral order of this world<sup>4)</sup>.

と指摘しているが、私も同感である。つまり「個人と環境」、「個人と個人」、「個人と世間の道徳律」の関係にのみ悲劇的要因を見るのではなく、多少の差こそあれ悲劇的感情自体主観的なものであるという観点からすれば、テスのカタストロフィはテス個人の悲劇と見ることが出来るのではないだろうか。

この小論では、Tess 自身の内面にこそ自己破壊の要因が存在すると捉え、個々の悲劇的事件とテスの内面的意識との相関関係の作用によっ

て、カタストロフィに追いつめられていくプロセスを分析・説明するのが目的である。

## II

ストーリーは純情可憐な美しい田舎娘テスの16歳から21歳までの短い生涯を悲劇的に物語る。しかし、この5年の歳月に収斂した個々の事件—rape, illegitimate child birth and death, love, marriage, husband's rejection, adultery, murder, hanging—の伏線が連鎖反应的に悲劇を継起しテスを破滅へと駆り立てる Hardy の巧妙な筆致が冴えている。

この物語の背景には一貫して死のイメージが漂っている。つまり納骨堂だけをこの世にとどめている没落貴族の d'Urberville の先祖の名前が黄泉の国から時空を越えて現世によみがえることによって悲劇の幕が開き、子孫のテスの死によって幕が引かれるからである。

Tess の opening はシェイクスピア風に極めてドラマチックにややユーモラスに演出されているだけに悲劇的 ending とのコントラストがいっそう強烈な印象となって読者の心にインプットされる。

テスの父親ジョン・ダービフィールド (John Durbeyfield) が行商の帰途、トリンガム教区司祭 (Parson Tringham) が呼びかけた 'Good night, Sir John' の一言が娘テスの悲劇的破局につながる起動力となる。好古家の司祭が郷土史を調べるうちに Durbeyfield はノルマンデイから征服王 William 公に随行してきた Sir Pagan d'Urberville の直系の末裔と判明したと告げられる。と、すっかり 'Sir John' になりきった父親は居酒屋で泥酔したあげく、翌朝2時に起きられず、蜂の巣箱を届けに行けない父親に代

わってテスと弟エイブラハムが老馬プリンスに荷を積んで出かける。その結果郵便馬車と衝突、プリンスは即死の惨事となる。この事件がテスをカタストロフィに落としめる転起点となり、同時に罪の意識がテスを支配することになる。‘What she could do to help them out of it (= quagmire)’ (p.53) とプリンスの死によって苦境にあえぐ父母を救いたい気持ちと、‘Tess’s pride made the part of poor relation one of particular distaste to her’ (p.54) と金持ちの分家と目されるダーバヴィル夫人のところへ「貧しい親戚」の名乗りをし、そこで物質的援助と仕事にありつこうとする屈辱に耐えられないプライドとの ambivalence の揺れの中で、彼女に「貧しい使者」になることを決心させたものは ‘The thought that she killed Prince’ (p.67) であった。つまり自分の不注意からプリンスを殺したとの自責の念から出た罪の意識によってである。しかし気の進まないテスは彼女を迎えに来た馬車の中で面白半分に無体な行動をとる女たらしのアレック・ダーバヴィルに処女の本能から身の危険を感じ、家族の許に帰りたと思うのだが、

How could she *face* her parents, get back her box, and disconcert the whole scheme for *the rehabilitation of her family* on such sentimental grounds? (p.72 ; my italics)

と、ナレーターがテスの心情を吐露しているように、自分に課せられた duty を放棄して帰っては「両親に顔向けできない」彼女の ‘pride’ と、「一家復興の計画をくつがえすことは出来ない」家族に対する ‘sensitivity’ がテスに ‘self-denying’ を甘受させ次の悲劇へと導くことになる。

アレック・ダーバヴィルの邸で働いて3か月経過したある晩、テスはアレックにレイプされ、その後数週間男女の関係が続いたが、彼女は性的罪の意識に苛まれて家に帰ることを決意する。

別れの言葉もなく一人マーロット村の実家に帰るテスの後を追いかけてきたアレックが言葉巧みに慰留しようとするが「あなたを愛してい

ないから」と拒否する。しばらくアレックに体を許したのは ‘My eyes were dazed by you’ (p. 93) と ‘I didn’t understand your meaning’ (p. 93) のためであって、これ以上物質的援助だけの目的で関係を続けていれば ‘your creature’ 「あなたの所有物」に成り下がってしまうからだ、肉体的に征服されたが精神的には優位を保持しようとする彼女の pride を誇示している。テスはここでもアンビバランスに揺れる。つまり家族に対する self-sacrifice と自分に対する self-preservation の拮抗の末、彼女の pride が self-preservation を選んだのである。しかし結婚の意志もなく愛もない男性に肉体を弄ばれた屈辱感<sup>アンビバランス</sup>は彼女をいたく傷つけ罪の意識となって心の中に巣くう結果的には彼女を死に追いやることになる。それはアレックと別れてのみちすがら ‘THY, DAMNATION, SLUMBERETH, NOT’ 「汝の滅びは寝ねず」、‘THOU, SHALT, NOT, COMMIT-’ 「汝、犯す勿れ」と赤ペンキで書いている男に自分のことを言われているような気がして顔を赤らめながら ‘...suppose your sin was not of your own seeking?’ (p.96) と自分が求めて犯した罪でなくても罪なのかの問いかけに示唆されているようにテスの意識はそれらの「聖句」に自分の罪を塗り込めて読むのである。傷心のテスを迎えた母親は ‘Why didn’t ye think of *doing good for your family* instead o’thinking only *of yourself*?’ (p.98 ; my italics) と、‘You ought to have been more careful if you didn’t mean to get him to *make you his wife!*’ (p.98 ; my italics) と言ってテスを責める。母親はテスの self-sacrifice は家族に対する当然の義務だと思っていたのであろうか。Hardy はテスのような吞んだくれで病弱の父親・少々頭の弱い楽天家の母親・貧困・7人の子沢山といった負の境遇に生まれついた薄幸の女性が辿る悲しい運命を

To her and her like, *birth itself* was an ordinal...whose gratuitousness *nothing* in the result seemed *to justify*, and at best could only palliate. (p.337 ; my italics)

と「生まれたこと自体が厳しい試練であり、それを正す術はない」とコメントして生の苦悩を表明している。やがてテスは妊娠に気づくと、世間をはばかり、人目を避けて罪人のように暮らすことになる。冷たい世間におびえるテスの姿を Hardy はこのように描写しテスの意識の問題に触れている。

Her flexuous and stealthy figure became an intergral part of scene. At times her whimsical fancy would intensify natural processes around her till they seemed a part of her own story. Rather they became part of it; *for the world is only a psychological phenomenon, and what they seemed they were.* The midnight airs and gusts, moaning amongst the tightly-wrapped buds and bark of the winter twigs, were formulæ of bitter reproach. A wet day was the expression of irremediable grief at her weakness in the mind of some vague ethical being whom she could not class definitely as the God of her childhood, and could not comprehend as any other.

But this encompassment of her own characterization, based on shreds of convention, peopled by *phantoms and voices anti-pathetic to her*, was a sorry and mistaken creation of Tess's fancy — a cloud of *moral hobgoblins* by which she was *terrified without reason*. It was they that were out of harmony with the actual world, not she. Walking among the sleeping birds in the hedges, watching the skipping rabbits on a moonlit warren, or standing under a pheasant-laden bough, she looked upon herself as *a figure of Guilt* intruding into the haunts of Innocence. But all the while she was making *a distinction where there was no difference*. Feeling herself in *antagonism* she was quite in accord. She had been made to break an accepted social law, but no law known to the environment in which she fancied herself such an *anomaly*. (p.101 ; my italics)

つまり「この世の中は一つの心理現象に過ぎない、自らの心で感じたものがその実体なのだ」とした上でテスが自分の想念の中で創造した現象の影におびえて、苦悩し悲しんでいるだけであると見ている。テスの意識の中で作り出した疎外感が彼女自身を 'a figure of Guilt' とみなしているのは周囲のものに調和しているのに調和しない 'anomaly' 「異分子」だと勝手に線引きをしているからである。そして自分を責め苛むあのいまわしい 'phantoms and voices' は実は外敵ではなく彼女の意識によって作り出された内なる間違った作り物にすぎないと示唆している。D. Kramer の言葉を借りると 'the perspective of the individual's consciousness is not always accurate'<sup>5)</sup> と言うものであろうか。しかし、私生児の誕生とその死をきっかけにテスは 'past is past' と精神的にも肉体的にも若々しく復活する。そのさまをナレーターがこのように描写している。

Almost at a leap Tess thus changed from simple girl to complex woman. Symbols of reflectiveness passed into her face, and a note of tragedy at times into her voice. Her eyes grow larger and more eloquent. She became what she could have been called a *fine creature*; her aspect was *fair* and *arresting*; her soul that of a woman whom the *turbulent experiences* of the last year or two had quite *failed to demoralize*. But for the world's opinion *those experiences* would have been simply a *liberal education*. (pp.112—113 ; my italics)

彼女の容姿は以前にも増して魅惑的であり魂は辛酸をなめたにもかかわらず自己を見失わなかった。即ちテスは世間の非難さえなければ「高等な一般教育」を身につけていると評価しうる女性になったのである。そこでテスは過去を断ち切るために故郷を離れる決心をする。このひたすら耐え抜くテスの姿に Hardy はサブタイトルにあえて 'A Pure Woman' と付記してテスに女性の理想像を投影していると言われている。

テスは再起を期して希望と歓喜を求めてトールボットヘイズの酪農場で搾乳婦として自立すべく故郷を後にする。一つの悲劇は表面的にはピリオドを打ったかに見えるが、テスの内面では種火となって燐り続け、次なる悲劇へと繋がるのである。‘past is past’はテスの意識から自分に突き刺す「罪」の刃を除去しない限り単に観念的な言い草に過ぎなかった。

### III

悲劇の第2幕は皮肉にも理想とする男性エンジェル・クレアを恋したために過去の罪の意識が大きく浮上し、テスは「過去の過ち」と「現在の愛」の狭間で苦悩する成り行きとなる。つまり「過去」を告白しなければとの思いと「過去」を告白すれば愛を失うのではないかとの思いのアンビバランスでテスの心は二つに引き裂かれるのである。テスの純情と誠実さは何度か告白しようとするができない。「過去」を罪と見なす意識から彼女自身を解放しない限り、彼女は自由な心で素直に語れないのだ。それにクレアを生身の男性というより ‘his soul the soul of a saint, his intellect that of a seer’ (p.193) と見ており、或いは ‘god’ に近い存在と崇拝しているテスにとって彼女の罪の「許し」をクレアに求める意識が無意識のうちに働いていたのであろう。クレアに出会わなければ、或いはもう少し平凡で人間的な男性に出会っていたならば、この結末に見る大悲劇には至らなかったかもしれない。テスは ‘self-preservation’ と ‘self-denying’ が交互に彼女の意識を支配し煉獄の苦しみを味わうことになる。クレアからの再三再四にわたる結婚の申し込みに耐えかねて、結婚できない理由を話すと約束し、いよいよ切り出してはみたが ‘I—I—am not a Durbeyfield, but a d’Urberville—’ と話をそらし貴族の子孫であると告げる。彼女の pride が無意識に作用し ‘self-preservation’ が ‘self-denying’ を抑えたのである。そして ‘whatever my offences」わたしにどんな罪があってもよいのなら」と暗に責任を転嫁して結婚を承諾してしまう。加えて ‘It is so long ago, and not your Fault at all’ (p.193) と過去を告白してはならないという母

の手紙に従うことにする。‘She dismissed the past — trod upon it and put it out,’ (p.193) と、「過去」と共に ‘the gloomy spectres that would persist in their attempts to touch her — doubt, fear, moodiness, care, shame’ (p.196) をテスの意識から払拭する。またしても悲劇の種火は消えたかに見える。しかしいよいよ結婚となると、テスの純情と誠実さは秘密を持つことへの罪の意識の重圧に耐え切れず ‘self-preservation’ と ‘self-denying’ の狭間で揺れ動く。エンジェル・クレアから贈られた花嫁衣装を試着したとき、母親がよく歌っていた「不思議な衣装」というバラッドを想い出す。‘That never would become that wife/That had *once* done *amiss*’ (p.205; my italics) と「一度過ちを犯した妻」の言葉にも敏感に反応し、王妃ギニア<sup>6)</sup>のようにドレスの色が変わって正体がばれるのではと恐怖心を抱き、‘self-preservation’ から ‘self-denying’ へと傾く。しかし告白の機を逸し、結婚初夜にエンジェルから罪の許しを乞う告白につられて自分の「過去」を話す成り行きとなる。双方からの告白にもかかわらずエンジェルはテスを許さず「君は僕が愛した女性ではない」「another woman」だと突き放す。テスが ‘I will obey you like your wretched slave, even if it is to lie down and die’ (p.226) と彼女の真情を訴えるが、‘There is a want of harmony between your *present* mood of *self-sacrifice* and your *past* mood of *self-preservation*’ (p.226; my italics) と冷淡にテスの矛盾を皮肉る。しかしテスがそんな言葉よりもいっそう恐れていたのは、エンジェルが彼女を ‘a species of imposter; a guilty woman in the guise of an innocent one.’ (p.225) と見なしているのではないかという事であった。彼女のプライドは、相手から見下げられ侮辱されることには耐えられない。この様に体面を重んじる性格もまたテスを破滅に駆り立てる原因の一つとなっている。例えばエンジェルにひたすら許しを乞うている時、無知な女と言われてかとなり ‘I am only a peasant by position, not by nature!’ (p.228) と即座に切り返し貴族の末裔のプライドを示している。そして私は立派な人間でないから結婚

できないと言ったのに、‘only — only you urged me!’ (p.236)「あなたが無理矢理結婚を急かせたから」と言うあたりに責任転嫁による self-preservation を全面に押し出している。彼女の pride は、女の武器を使って相手にすがりつくことは出来ない。エンジェルと何とか一緒に暮らせば自分にとって有利であることも本能的に知っていながら、なりふり構わず泣きつくことが出来ないのである。このあたりのことをナレーターは

‘If Tess had been *artifful*, had she made a scene, fainted wept hysterically, ... he would probably *not* have *withstood her*. But her mood of *long-suffering* made his way easy for him, and she herself was his best advocate. *Pride*, too entered into her *submission* —’ (pp. 246—247 ; my italics)

と、このように描写して、テスのやっかいな pride が事の成り行きに無謀なほどの黙従を強要することで自己を抑え、赤裸々な自分をさらけ出せないでいるとしている。もしテスが‘pride’を捨て、エンジェルの胸にすがっていたら、事態は違った結果になっていたかも知れない。当時は離婚が出来なかった為、名のみの夫婦のまま夫はブラジルへ妻はマーロット村の実家へと東西に別れる。エンジェルから手渡された生活費50ポンドのうち25ポンドを母親に与えている。これも夫に捨てられた惨めな妻の心情を見抜かれないための虚勢から ‘as if the wife of a man like Angel Clare could well afford it’ (p.251) と見えを張ったのである。そして事情を気取られないために故郷を後に酪農場へ出稼ぎに行く。しかし人手が不用になり解雇され、命綱の25ポンドは底をついてしまう。エンジェルの銀行から30ポンドの入金があったが、母親からの無心で20ポンド送金する羽目になる。「金が入用な時は僕の父に頼むように」とエンジェルが言っていたのを思い出したが ‘delicacy’, ‘pride’, ‘false shame’ (p.264) と言ったテスの意識が彼女の行動を規制する。しかし背に腹は代えられずエンジェルの両親に会おうと決心をする。ところが

不運にもエンジェルの二人の兄たちの「エンジェルは無分別な結婚をしたものだ」という会話を小耳にはさみ、加えて夫のかつてのフィアンセで知的で美しいマーシー・チャント嬢の姿を見かけて、テスの‘pride’と‘false shame’が彼女の決心を挫き、義父母に会わずに引き返す。しかも皮肉なことに会いたくもないアレックに再会したことで破滅は決定的なものとなる。テスの体に未練のあるアレックは母親の死後改心して巡回説教師になっていたがテスとの再会を機にその職を投げ捨て執拗に結婚を迫る。重労働と貧困に疲れ果てたテスは

...if she had been free to accept of the offer just made her of being the *monied Alec’s wife*.; It would have lifted her completely out of subjection, not only to her present *oppressive employer*, but to a *whole world* who seemed to *despise her*. (p.304 ; my italics)

金持ちのアレックと結婚すれば、暴虐な雇い主や世間の人々にさげすまれないで済むのではとさえ思うのである。他人の軽蔑に耐えられないテスの矛盾した気位の高さが伺える。と同時に空想とは言え、憎悪しているアレックとの結婚を考えるほどテスが心身ともに傷ついていることが分かる。唯彼女は地獄のような境遇から抜け出したかったのである。不幸は重なりテスの父親の急死、それに付随して起きた貸借契約切れで家を出なければならない不運に見舞われ一家はホームレスとなり路頭に迷うことになる。神にも夫にも見捨てられたとの絶望感の中で吐露するテスの本音をナレーターが代弁している。

Whatever *her sins*, they were not sins of intention, but of *inadvertence*, and why should she have been *punished so persistently*? (p.336 ; my italics)

つまり不用意から生じた罪なのに、これほどまでに罰せられねばならないのか、との哀訴には彼女が罪の被害意識から解放されていない実情を示唆している。他方テスは家族の為に何と

かしなければとの思いの中から ‘to be their Providence’「家族の救い主」になる決意をする。テスが self-sacrifice に徹しようとする思いを ‘Providence’ で表現したのであろう。これは冒頭で彼女が老馬プリンスを殺したという罪の意識から家族のために self-sacrifice を甘受するシーンと重層的に展開していく。

しかしかには家族のためとはいえ、同じ過ちを繰り返すテスの行動は宿命である。たとえ冷遇され軽蔑されるとしても、彼女の愚かしい pride を捨て、エンジェルの父親に事情を打ち明けてすべきであった。心情的にはすがりたかったのであろうが、それが出来ないテスの pride と哀れさがアレックとの会話に表れている。

‘I shall not come—I have *plenty of money!*’/‘Where?’/‘At my *father-in-law’s*, if I ask for it.’/‘If you ask for it. But you won’t. Tess; I know you; *you’ll never ask for it — you’ll starve first!*’ (p.336 ; my italics)

アレックはテスがお金の無心なんか出来ないことを見抜いている。お金を要求するよりは餓死を選ぶだろうと皮肉る。彼はテスの自尊心が体面を重んじることを百も承知しているのである。

#### IV

さて、テスの夫エンジェルはブラジルで病に倒れ農場経営の夢もついでに ‘dead Christ’「死せるキリスト」(p.347)の姿さながらに痩せ衰えて帰国する。アレックの愛人となって暮らしているテスをようやく捜し当て運命的な再会となるが、これが最終局面の決定的な引き金となって、テスのカタストロフィを一気に加速する起動力となる。‘too late’ とつぶやくテスの脳裏に去来した思いは何であっただろうか。動転しながらも self-preservation の本能が無意識に働いてか、先ず現状の言い訳で自己弁護をしている。

*I waited and waited for you,...* I wrote to you, and you *did not come!* He (= Alec) kept on saying you would *never come any*

*more,...* He was very *kind* to me, and to mother, and to all of us after father’s death. (p.356 ; my italics)

I *hate* him (= Alec) *now*, because he told me a lie — that you would *not come* again; and you have *come!* (p.356 ; my italics)

引用の二文を比較して分かるように、テスは self-sacrifice に甘んじ、少なくともアレックの親切心に感謝し、肉体を通しての愛も少しは感じていたのであろう。そのことは「今はアレックを憎みます」の表現によって推察できる。もしテスの心の中では死んでいたエンジェルが出現しなければ、それなりに幸福な人生を送ったかもしれない。テスが咄嗟に self-preservation に転じたのは、エンジェルが生きて目の前に立つことで、彼女の現在の罪 adultery を意識した self-shame と罪の意識のすりかえのように思える。

エンジェルは ‘too late’ というテスの言葉の意味が分かったと ‘Ah — it is my fault!’ (p.356) と言って去っていくのだが、ここでテスは厳しい選択に迫られる。つまりエンジェルと一緒に行くか、アレックの許にとどまるかである。エンジェルが去るとテスはアレックに夫は帰らないと嘘をついたと責め立て、彼のために二度もエンジェルを失ったと歎く。そして ‘he is dying — he looks as if he is dying!... And my *sin* will *kill him* and *not kill me!*’ (p.358 ; my italics) とテスの「過去」と「現在」の罪の意識が相乗してその苦悩は極限状態に追い込まれる。その結果アレックを刺殺しエンジェルの後を追うのだが、追いついた時彼女が言った最初の言葉は ‘do you know what I have been running after you for? To tell you that I have killed him!’ (p.361) 「アレックを殺したことを告げるために追い掛けて来た」であった。この言葉の伏線はエンジェルがテスを捨てる理由に「その男（アレック）が生きている限り一緒に暮らせない」と言った言葉である。テスは言葉を続けて許しを乞う。

‘Will you *forgive* me my *sin* against you, now I have killed him?…It came to me as a shining light that I should get you back that way.’ (p.361; my italics)

これでも分かるように、「あの男を殺したのだから私を妻として認めてくれますか」ではなくて「あなたに対する私の罪を許してくれませんか」と尋ねているのは奇異な印象を与える。しかもテスはエンジェルから彼女の罪の許しを得るために殺人という新たな罪を犯したわけだが‘ignoring that there was a corpse’ とナレーターが言っているようにテスとエンジェルのこの場の逢瀬にはアレックの死体など念頭になかった。つまりアレックを殺した行為に全く罪の意識はなかったのである。換言すればテスの罪の意識は個人的主観的なものである。エンジェルに愛されたい思いの深さが、実際以上に彼に対する彼女の罪の意識を膨張させ、そのような虚構の意識の中で生きなければならない苦悩からの解放は殺人者となり、自らの生命と引き替えという高い代償を支払うことになったのである。

‘Tenderness was absolutely dominant in Clare at last’ (p.362) と、ここに至ってエンジェルの愛は ‘God’ の愛へと昇華し彼女の罪は許される。数日後逮捕され刑場の露と消えると共に、テスを苦しめた罪の意識からも永遠に解放される。

‘Sir John’ の一言で幕を開けた tragic drama は ‘hanging’ という悲劇的な ending で幕を閉じるのである。ほんの些細な事もその関わり方いかんによっては人間不測の事態に至るそのプロセスを Hardy は「人生の悲劇的精神の神秘さ」の万華鏡を通して現代の人間が抱える生の苦悩・弱さ・矛盾・残酷さ・優しさ・誠実さな

どが複雑に絡み合い思わぬ悲劇を生む恐ろしさをテスの生き様に重ねて描いているように思えるのである。

## V

以上、テスのカタストロフィの構図を、テスが生きていた社会的・道徳的・封建的・時代規範の中で、被殺者アレックとの関係が rape を出発点とし、夫エンジェルの女性観とテスへの愛の結晶化が硬直未熟であった事、家族の状況や生計が当時の多数の女性同様貧困の環境にあった事などを概観した。しかしテスのカタストロフィの要因は、愛と幸福を希求しつつ絶えず罪の意識にとらわれ、余りにも自己内面への戦いに終始した事にある。またその性行は、自我独立の意志を貫く時に tenderness, sensitivity, respomsibility, endurance と云った美德が、現状打破や他者を包摂しつつ自己確立を計るときに行動の妨げとなっている。そして適応のパターンは self-sacrifice を運命と諦め、自己放棄をするには女のプライドが許さず、この二項対立の葛藤の中で、常にマイナスの方向へと、自己同一性の証をずらしていく。さらにその内奥には、過去の過ちへの罪の意識が存在していた。その矛盾は obsession やおびえを生みテスを破局へと追いつめていく類のものであった。

愛する男を、神とし（テスの結晶化）その男が夫の座にあれば、神への供物として raper の死体を捧げ（テスの罪の意識・女の攻撃性）、我が身を消滅させることで自己存在を主張（罪の意識からの解放を）したのである。まさに *Tess of the d’Urbervilles* における Hardy の tragic vision, tragic form は ‘a tragedy of consciousness’ であると言えよう。

## 文 献

- 1) *The Return of the Native, The Mayor of Casterbridge, Tess of the d’Urbervilles, Jude the Obscure.*
- 2) Hardy T (1974) *Tess of the d’Urbervilles*, London, テキストの引用文は文尾に (p. ) と記入する。
- 3) 金子正信 (1990) ハーディー文学試論, 千城出版社, 東京, p. 142.
- 4) Kramer D (1975) *Thomas Hardy: The Forms of Tragedy*, Wayne State University Press, Detroit, pp. 114.



- 5) *Ibid.*, pp. 114.
- 6) Hardy T (1974) *Tess of the d'Urbervilles*, Notes, pp. 385 参照. “The Boy and the Mantle” というバラッド. アーサー王の妻ギニビア王妃は、一人の少年が魔法のマントを着て宮廷に現われた時、王の命令でそのマントを着ると、色が変わり王妃が pure でないことを暴露するという内容のもの.